

増え続ける標本の収容

事務局

平成 15 年度から始まった県の自然史資料の保存事業も、今年で 6 年目に入りました。その間最初に寄贈された伊藤二郎氏の植物標本から、昨年度末で、25 の個人や団体から約 15 万点余の多くの標本の寄贈を受け、今までに約 5 万点の整理と仮評価が終わり、県への移管がなされています。

今年度より、収容室の面積の倍増により、収容可能な空間が広がりました。そのため今まで、寄贈依頼はあったものの収容できずにいた標本の搬入が可能となったのです。

6 月以降、3 件の寄付、標本収容を実施しました。始めは、土 隆一先生の海外貝化石標本 25 箱約 1,000 点です。これは、土先生のお宅の一室に保存されていたもので、以前寄付いただいた国内産の貝化石に続く第二弾です。

次に、故志村義男氏のシダ類植物標本約 1 万点。志村義男先生は、平成 13 年にご逝去されたのですが、先生のお宅の納屋の 2 階部分に保存されており、ご遺族の方から、当 NPO の杉野孝雄理事に、その標本の処理を委任されていたのです。長いこと屋根裏で、やや環境が悪い所に保存されていたせいか、新聞紙は変色し、一部虫に食われたりしていましたが、静岡県企画部が配車してくれた車で、センターへ運び込み、同時に植物関係の書籍や学会誌、雑誌なども搬入しました。この標本については、現在杉野理事が整理中です。

7 月に搬入されたのは、故寺田 徹氏の現世貝類、特に駿河湾の貝を中心にした約 1 万点の標本です。寺田さんは、この NPO の前身の静岡県立自然史博物館設立推進協議会において、監事として、博物館建設推進に向けて努力してくださった方です。しかし平成 12 年 10 月志半ばで逝去され、数 10 年に渡って集められた標本は、ご家族が保存されていました。しかし、寺田さんの 7 回忌終了後、家族で話し合い、当 NPO を通して県に寄贈するとともに、有効に活用してもらいたい旨連絡がありました。寺田家の一室の壁一面に積み上げられた缶の山々。お菓子などの空き缶などに、きちんと整理された標本、約 300 缶を運び込み、これから

登録、整理をしていきます。この寺田標本の価値や内容については、後に書かれている、コレクション紹介を参照してください。

どんどん、集まり続ける貴重な標本の数々。まだまだ多くの隠された標本が存在します。これらの標本の価値を生かすも殺すも、これらを展示、保存する施設にかかっています。

一刻も早い、設立への準備が望まれます。



寺田 徹氏貝類標本



土 隆一氏海外の貝類化石標本



志村義男氏シダ類標本

他県自然愛好会との交流報告 「信州昆虫資料館と光風轆轤ハウス」

池谷仙之



オランダの昆虫学者 Swammerdam, Jan によって書かれた “Histoire Generale des Insectes” (1682 に出版された英訳本) を説明する安藤先生 (右から2人目)。

6月7日、8日に長野県上田市を訪ね、地元の各種自然愛好団体との交流会をもった。このような試みは最初のことなので、本会からは多くの会員には声をかけずに理事を中心とした8名が参加した。目的は開館から5年を経た小県郡青木村の「信州昆虫資料館」を見学することと、上田市諏訪形に手作りで建てた「光風轆轤ハウス」で夕食を囲みながら自然史に関する研究活動の情報交換をすることであった。千曲川のほとりに奈良時代から栄えた塩田平の上田市は信州の鎌倉と称され、豊かな自然とともに多くの史跡が残されている。静岡からは、韮崎、岡谷を経て長野自動車道の麻績ICから県道277、国道143を通過して田沢温泉を目指し、十観山中腹の昆虫館まで約4時間の行程だった。

信州昆虫資料館(4月上旬から11月中旬まで開館)は「ハチ刺し症」の研究でも著名な青木村の内科医小川原辰雄先生のご努力によって開設された小さな博物館である。長野県産全種の蝶(149種)をはじめ、日本産のほぼ全種(約250種)と甲虫やハチなどの昆虫標本を主体に生態環境や個体変異、地域変異の解説と共に展示されている。上田市の故清



チョウの展示に見入る

水明氏の東信地方アブ類と清水常夫氏の上小地域ハエ類のコレクションも圧巻であった。上田平や浅間連峰を展望できる標高1000メートルの広葉樹林の中の建物は元農協の保養所で、広い玄関を入るとロビーにはグランドピアノが据えられ、その続きに開架式の図書室(昆虫関係の文献や図書など約2500冊)があり、瀟洒なホテルにきたようである。標本は2階の大広間を改装して展開され、参加した高橋、諏訪、清さんはチョウ、平井さんは甲虫のコーナーから時間が来ても離れず、食い入るように見ていた。

この日は顧問のトンボ博士、安藤裕先生(筑波大名誉教授)の「ムカシトンボとマダラヤンマ」の講演会があり、地元の保護研究会のメンバーと共に先生のライフワークであるトンボについてのアカデミックな話を拝聴した。ティーセレモニーは心象画家でもある当館主事の野原未知さんの大作「風を孕んで」(140 x 680 cm)が壁いっぱいに掲げられた豪華な造りのダイニングルームで、村の方々による「そばがき」と「そば団子のあげもの？」のおもてなしを堪能した。建物の周囲は草原と山林に囲まれ、まだ八重桜の花びらが枝にしがみ付き、つつじや藤の花が咲きはじめ、静岡とは違ってようやく新緑の季節がやって来たような遅い春の様相であった。ここでは昆虫採



休耕田に造ったビオトープ池

集解禁の自然観察会など、時にはコンサートも開かれるとか。うらやましいような環境である。また、最近搬入したという岩国市の昆虫画家山田靖さんの水彩画 250 点が別室に展示されていたのに気づかず、これを見なかったのは不覚であった。

昆虫資料館の見学後、「NPO うるわしの里」代表の小泉寿彦氏の案内で浦野地区に展開されているビオトープを見せて頂いた。かつての改修工事によって三面コンクリートになっている河川の所々にごろた石を沈め、草を生やし、小魚や水棲昆虫を育てている。また、遊休荒廃農地を整備して造った池にはアヤメやショウブが咲き、ヒシが繁茂していた。野草園はまだ造成中であつたが、背後のオオムラサキの森と孟宗竹の林など夢一杯の計画である。静岡では放置された孟宗竹の拡大に悩まされているが、所変われば貴重な竹林なのかと考えさせられる。夕方、室賀温泉「ささらの湯」で汗を流し、今夜の宿となる光風鰐輪ハウスに急いだ。

光風鰐輪ハウスは上田市街を一望できる小牧山の中腹に建てられた憩いの自由空間「いつでも、だれでも自由に使い、集える場所が欲しい」との願いで、家氏重子さんご夫妻の手作りの家である。地域のコミュニケーションの場として使う人の自主管理の下に、寄付や志しによって運営・維持されている。80 畳近い大広間と 24 畳の和室にロビー、足湯・浴室・台所、レンガ造りのパン焼き釜などを備え、だれでも受け入れる家族的な雰囲気は地元の人々の憩いの空間であり、活動の拠点となっている。ここではバーベキューが用意され盛大な歓迎を受けた。

日暮れと共に大広間での団らんは深夜まで自然史の話に花が咲き、最後は酔いつぶれて布団に包まった。千曲川少年団、とんぼの会、環境市民会議、砥石伊の会など多くの方々と懇親できたことは有意義であつた。

夜明けとともに三宅さんが裏山の探鳥に出かけたのはいつものことで、重子さんの心の中もった朝食を頂き、高仙寺小泉大日堂に収められている「シナノイルカ」の化石（模式標本）を文化財審議委員の甲田三男先生の案内で見学した後、氷河時代の生き残り「ブルーに輝く美しいマダラヤンマ」が生息すると云う江戸時代に造られた溜め池を訪ねたが、残念ながら成虫は 9 下旬～10 月初旬でなければ見られないとのこと。学ぶべき沢山の情報を得て静岡に戻った。

最後に今回の交流会をアレンジして下さった筆者の 40 年来の友、化石少年であつた小太郎こと塚原吉政氏に感謝する。



ヤマメの塩焼きに舌鼓する野外パーティーの一コマ



延々と続く夜中の議論

南アルプス 二軒小屋周辺で自然観察会

諏訪 哲夫



榎島に新しくできた白旗史朗記念館



楽しくテントでバーベキュー

7月26,27日、大井川の源流、南アルプスの麓標高1,400mにある二軒小屋の周辺で観察会を行いました。昨年は直前になって県道南アルプス公園線が畑薙第一ダム手前で道路崩落のため通行止めとなり、残念ながら観察会は中止となってしまいました。今年も井川ダム付近の崩落で主要道路は通行止めとなって心配されましたが、迂回路があったため何とか実施することができました。

大井川源流域は長野県・山梨県・静岡県の三県にまたがってそびえる間ノ岳を頂点とし、その南にかけて約2万5千haが東海パルプ所有の山林で、後に東海パルプの創立者となる大倉喜八郎が明治28年購入して以来100年以上にわたって木材の生産が行われてきたところです。その拠点となっていた二軒小屋に静岡方面から行くことは、今では車で日帰りも十分可能となりましたが、以前は大変な苦勞を強いられました。山梨県早川町を經由して徒歩で6時間、標高2000mあまりの転付峠を越えてやっと二軒小屋にたどり着きました。あるいは大井川に沿って井川から延々70kmを歩くことになりました。昭和30年代初めまでは静岡から井川までの富士見峠越えの県道もなかったのですから、3日も4日もかかったことでしょう。

参加者は、野鳥、哺乳類、昆虫、地質に興味のある会員16名でした。昆虫班は1日目、林道東俣線の赤石沢橋および木賊周辺を主体に調査・観察を行いました。この日は朝から夏の日差しが強烈に照りつけ気温も高いため、普段は樹上を飛んでいる蝶も涼しいところを求めて、大きな樹木に覆われ、路面の湿った林道上

に降りている個体がいくつか見られました。これらは、ウラキシジミ、アイノミドリシジミ、フジミドリシジミ、ミスジチョウ、エルタテハなどでした。2日目も好天に恵まれ、昆虫班は西俣を2kmほど調査しました。この西俣、かつて極めて昆虫類の多いところでした。しかしどのような理由なのか分かりませんが今は激減してしまいました。それでもこのような状況の中で静岡県ではまだ数頭しか採集されたことのない珍しい蝶、ウスイロオナガシジミが複数採集されたことは大収穫でした。

鳥類班は、初日、東俣林道沿いに野鳥の生息調査を実施、途中の植林地でクマハギにより枯れたヒノキが目立っていたのが印象的でした。2日目は、一部の人は千枚小屋から千枚岳へと登りました。途中ライチョウには出会えませんが、ホシガラス、イフヒバリといった高山に住む野鳥が観察されました。千枚小屋周辺では、シカによる高山植物の食害も目立ち、マルバダケブキ、トリカブトといった食べられない植物だけが残っていました。宿泊は、一部榎島口ツジに泊まった会員もありましたが、二軒小屋宿泊班はテントと登山小屋を利用し、偶然東京から蝶の調査に来ていた静岡昆虫同好会会員で静岡出身のU氏も交えバーベキューを楽しみ、会員相互の親睦と交流を深めました。夕方から、上空を飛ぶヤマコウモリを観察し、暗くなってからは、バットデテクターを使って、ヤマコウモリやヒナコウモリ属のコウモリの超音波を聞いたりしました。夜、遠くに雷なども聞こえましたが、解散までは天気に恵まれた自然観察会でした。

群馬県立ぐんま昆虫の森見学記

三宅 隆

8月上旬、当 NPO 収蔵のナウマンゾウの牙の鑑定を依頼するため、預けてあった群馬県立自然史博物館へ行く機会があり、その帰りに桐生市にある、新しい環境教育施設の「群馬県立ぐんま昆虫の森」を見学してきました。この施設は、2005 年 8 月 1 日に、桐生市郊外の新里町の 48ha という広大な土地に建設された、生きている昆虫を主体とした、国内では珍しい施設として開園しました。園長は、NHK ラジオの子供質問コーナーでおなじみの矢島稔さんです。

実は、私が東京の多摩動物公園で獣医実習をしている時に、昆虫館の係長をされていたのです。十数年ぶりにお会いしましたが、とても喜寿には見えないで、お元気で安心しました。

この園は、昆虫観察館と、広大なフィールドからなっています。フィールドは、水田、桑畑、富士山沿、雑木林の 4 つのゾーンからなり、移築したかやぶき屋根の農家もあります。広いため、職員やボランティアによる自然観察ガイドツアーで見学することができます。雑木林コー

ナーのクヌギ林では、目の前で沢山のカブトムシやカナブンが樹液に群がり、来ていた子供たちは大興奮でした。園内には、昆虫に合わせた色々な食草が植えられ、管理されていました。

昆虫観察館は、透明なドームに覆われた大きい建物で、3 階の構造となっており、3 階の入口から入っていきます。2 階には里山の昆虫たちの生態展示やワークショップフロアがあります。1 階には沖縄西表島の景観を再現した生態温室があり、オオゴマダラやコノハチョウなど亜熱帯のチョウが乱舞し、バッタやナナフシが見られます。これらの昆虫を常に展示するために、別館として食草・育成温室が併設され、各種チョウの孵化、育成をしています。これら幼虫の飼育には、この地方の伝統産業であった養蚕技術が生かされているとのことでした。

年間約 10 万人の来園者があり、運営は、17 名の県職員と臨時職員 18 名の 35 名。それにボランティアが 80 名くらいで行っているとのこと。やはりボランティアの力は必要ですね。



昆虫観察館



樹液に群がるカブトムシ



亜熱帯生態温室



帽子にとまったコノハチョウ

静岡県の昆虫 (13)

アサギマダラ

清 邦彦



三重県で再捕獲された富士山(山梨県側)からの個体。
Fujiのマークがある。

アサギマダラが海を越えて渡りをするのが分かってきたのは1980年代になってからである。それまでは、秋になると山地から低地に降りてくるくらいにしか考えられていなかった。ところが沖縄などの南西諸島では春と秋には多いのに夏になるとまったく姿を消すことから、海を越えての移動が考えられるようになり、鹿児島昆虫同好会を中心に、はねにしるしをつけて放すマーキング調査が行われるようになった。その結果、種子島で放したアサギマダラが福島県で見つかるという、予想をはるかに超えた長距離の移動をしていることが明らかとなった。

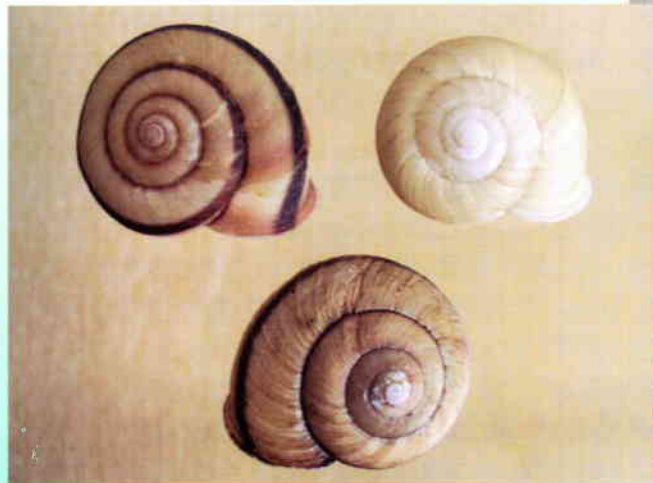
一方、愛知県の伊良湖岬には、秋になるとサシバなどの渡り鳥の渡りの観察に多くの野鳥観察者が訪れている。渡り鳥と一緒にチョウのアサギマダラも次々と海に出て行く事に気づいた静岡県の野鳥観察者の情報に、静岡昆虫同好会による調査が行われ、その移動のようすを確認するとともに、伊良湖で放したチョウが和歌山県で再捕獲されるという成果をあげた。やがて各地の自然史博物館などを中心にしてマーキング調査が盛んに行われるようになり、夏は山地でイケマという落葉性のガガイモ科の植物の葉を幼虫が食べて育ち、羽化した成虫は秋になると移動して低地や南西諸島などに達する。そこで幼虫がキジヨランやサクラランという常緑性の植物を食べて育ち、翌年羽化して成虫となり、春から初夏にかけて北の方向や山地に移動する。そんなことが分かってきた。

今ではインターネットの普及とともにマーキング調査はますます盛んになり、毎年数百例の移動が確認され、移動距離も2,000 kmを越えるものも出てきた。台湾との行き来も明らかになっている。しかし、チョウに方向が分かるのか、自力で飛んで行けるのか、まだまだ謎は多い。

静岡県のカタツムリ(1)

ペリー遠征隊による採集

松本雅道



シモダマイマイ (上)、ヒダリマキマイマイ (下)



Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japanより

静岡県は、幕末に外国人の訪れることのできた数少ない地であり、多くの生物の標本が海外に持ち出された。下田へ来航したペリー遠征隊の採集した貝類を研究したJohn C. Jayは、1856年に出版されたアメリカ議会への報告書「Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the years 1852, 1853 and 1854」(Ⅰ～Ⅲ巻、日本遠征記)のⅡ巻に収められた論文中で、2種の日本産のカタツムリを記載した。

その一つ、シモダマイマイは下田産の新種として記載されたが、現在ではミスジマイマイの一亜種とされる。貝類プレートⅤには、殻皮の状態から死貝のものと考えられる2つの色帯の型が示されている。シモダマイマイではこの型は多くはないが、出現頻度の低い色帯の個体が選ばれた理由は良くわからない。残念だが、江戸時代の日本人にとってカタツムリは産物としても愛玩物としても重要ではなく、分類しようという姿勢は希薄だった。したがって、これは静岡県における、種名の明らかな最も古い記録でもある。

ペリー来航以前に記載されていたヒダリマキマイマイの新参異名とされる *Helix perryi* ペルリヒダリマキマイマイも、江戸産の新種として記載された。しかし、ペリー一行は入府していないから、江戸で採集したとは考えられない。Jay 論文中では他に、江戸の島、江戸湾の産地表記があり、江戸の地名はペルリヒダリマキマイマイの記載にのみ使用された。Ⅱ巻に収められた他の著者の論文をみると、鳥類(横浜、江戸湾)、魚類(江戸湾)、植物(横浜)の表記がある。横浜では遠征隊による採集が精力的に行われたのに、Jay 論文中に見られないことから、意図的に横浜に対して江戸という地名を使用して、遠征隊の外交的成果に敬意を表し、ペリーに献名したと推察される。また、この種は下田付近でも多産するにもかかわらず、江戸と表記できる産地のものが選択されたと考えるのは、考えすぎだろうか。

ペリー遠征隊の報告書は、自然誌という政治とは無関係に思える部分にも、新興国アメリカの気負いが垣間見える。カタツムリに限らず、日本で見られる普通種の多くは欧米で記載され、その閲覧や複写には努力が必要となる。タイプ標本となれば、なおさら困難が多い。自然誌に対して戦略的に取り組んできた欧米の圧力が、現在も続いている。自然を子供の学習教材としてしか捉えない日本の傾向に、底の浅さを感じるのは私だけだろうか。

ミニ博物館 静岡の化石・鉱物展報告

石にかけた青春の思い！故大橋昭彦氏化石・鉱物コレクション

横山謙二

8月25日（月）から31日（日）まで、ミニ博物館“静岡の化石 鉱物展”を静岡県自然学習資料センターの3階で開催しました。ここで行うミニ博は、これで4回目になります。今回こそは、たくさんの人に見てもらおうと努力してきました。

展示準備は6月から始めて、約2ヶ月間かけてじっくりと手間をかけて作成しました。特に苦労したのは、標本ケースでした。なるべくお金をかけず、廃材をうまく利用し作成しました。

展示は、大橋昭彦氏コレクションをメインに、NPOが静岡新聞日曜版に連載中の『しずおか自然史』の地質関連標本やナウマンゾウ発掘関連標本を展示しました。大橋昭彦氏コレクションの見どころは、北海道産アンモナイトや古代サメのメガロドンの歯化石で、大橋氏愛用の採集道具やノートなども展示しました。『しずおか自然史』では、ミニ博初公開のNPO所蔵の旧浜北市産のトラの化石レプリカ標本を展示し、ナウマンゾウ発掘コーナーでは、同じくミニ博初公開の日本海産のナウマンゾウ牙を展示しました。また、牧之原市から産出した静岡大学キャンパスミュージアム所蔵のナウマンゾウ臼歯（レプリカ）も見どころの一つでした。また、子供たち大人気の化石発掘体験コーナーも設置しました。

開催期間中、朝から多くの見学者がありまし

た。また開催初日・最終日には、故大橋昭彦氏のご両親が見学にこられ、息子さんが集められた貴重な標本を多くの方に公開できて喜んでおられました。見学者は、化石・鉱物に興味のある方が多く集まり、中には採集された岩石をもってこられ、石の種類を熱心に質問される方もいました。また、今までのミニ博ですっかりおなじみになった近所の小学生も毎日のように、友達連れで見学に来てくれました。また、来場者からは、これらの標本を常設展示してほしいという要望がいくつも聞かれました。

来場者数は、初日は初日来場者数最高の60名でした。2日目も64名程来場者があり、そして3日目には、1日の来場者数最高記録の87名の入場者がありました。5日目で、ここで行ったミニ博の最高入場者数244名を超えました。そして、週末土曜日には95名、日曜には96名と1日の来場者数最高記録を更新し続け、開催期間1週間の来場者数合計は過去最高491名になりました。また、期間中6名がNPO会員になってくれました。今回のミニ博では、事前に学校へチラシを配るといった宣伝はせず、会員への葉書による開催案内、及び報道資料による新聞などへの広報活動だけでしたが、にもかかわらず、これだけの来場者があったのは、静岡には縁のないアンモナイトなどの標本が見られるといった魅力があったからだと思います。



故大橋 昭彦氏のご両親（写真左の中央）



標本室の見学

また、県内にこれだけ多くの化石・鉱物の愛好家がいることを知ることができました。次回のミニ博では、さらに、より多くの人に見学してもらえよう努力したいと思います。

今回のミニ博では静岡県自然学習資料センター初の博物館実習があり、静岡大学の実習生に即戦力として働いてもらいました。また、静岡大学キャンパスミュージアムからは標本を貸していただきました。今後も、大学との連携の必要性を感じました。



大人気！化石発掘体験コーナー



大きなアンモナイトに触る



採集した岩石を持ち、質問する来場者



しずおか自然史コーナー



しずおか自然史コーナー



子供たちに説明する実習生、村本君



活躍してくれた実習生
(左：村本君、右：佐津川さん)

寺田 徹 貝類コレクション

延原 尊美

寺田 徹さんは、静岡県自然史博物館ネットワークの前身である静岡県立自然史博物館設立推進協議会のメンバーであり、静岡県の海生貝類の熱心なコレクターでした。2000年10月に急逝されてしまうまで、25年間にわたって駿河湾内の貝類を定期的に採集し続け、貴重な標本や生態学的なデータを蓄積されてこられました。本年7月に、ご家族の方からそれらのコレクションをご寄贈いただきましたので、その内容を紹介いたします。

駿河湾は、海底地形や海流系の影響で、海洋生物にとって実に多様な生息環境が存在しており、世界的にも重要な海域です。寺田さんの採集活動は、定期的に駿河湾沿岸の20近くの漁港に通い続け、漁船の収穫物をその漁法とともに丁寧にチェックし、また自らも海岸・潮間帯での採集を積みかさねるという地道なものでありました。この作業を、25年間、しかも駿河湾の両岸（西伊豆側と静岡一御前崎側）を対象に継続されたその情熱には圧倒されます。海岸から深海までありとあらゆる生息場の貝類を収集することに努められてきた結果、駿河湾に生息する貝類のほぼ全種をカバーしたコレクションとなっています。駿河湾産の標本だけでも、713種（巻貝類541種、角貝類5種、二枚貝類167種）、外国産の標本も含めれば2,025種（巻貝類1559種、角貝類7種、二枚貝類445種）、総計10,000点以上にも及びます。

標本のほとんどは生貝を処理した貝殻標本で、保存状態はきわめて良好です。ニシキガイ、ウグイスガイ、ヒヨクガイ、ギンエビス、イトマキナガニシ、メダカラガイなどについては、個体変異、成長履歴、地方型を示すと思われる標本群についても保管されており、分類学的に価値ある集団標本も含まれています。また、個々の標本には採集日・産地を記入したラベルがきちんと付されていて、採集ノートに記されたそのときの採集法のデータと対応させて、駿



寺田 徹氏貝コレクション

河湾内の貝類相の25年間の変化を解析することもできます。

寺田コレクションのように、定点における生物相の変化を長期間にわたって記録した資料は、地球温暖化や環境汚染が生物へ及ぼす影響を評価する上で欠かせないデータベースです。しかしながら、官公庁や行政機関、大学も含め各研究機関においてさえ、そのような長期観測データを標本と対応できる形で整備している例は決して多くありません。この点からも、寺田コレクションは、静岡県の一級の自然史資料といえます。

実際に、寺田コレクションには、ウネダカモミジボラ、シュスツヅミ、ヒメキリガイ、オニノハなど、これまで紀伊半島以南にしか分布が認められていなかった貝類が数多く含まれています。つまり寺田コレクションでの採集記録は、これら南方系種の分布の北限をさらに北側に更新することになります。採集記録を整理すると、これらの南方系種は、伊豆半島側に限らず静岡一御前崎側でも繰り返し採集されており、湾内に定着している可能性も考えられます。寺田コレクションは、ここ25年間における駿河湾の温暖化を裏づける基礎データとなる可能性もあり、学術的にも散逸させてはならないコレクションといえます。

清水区 岡生涯学習交流館での『静岡県の自然展』報告

横山 謙二

7月25日（金）～8月7日（木）に静岡市清水区にある岡生涯学習交流館からの依頼で展示をおこないました。

岡生涯学習交流館は、旧清水市の中央公民館があったところにあります。展示場所は、1階ホールで、とても広く80mもありました。A3サイズの写真が60枚も展示することができました。

展示内容は、静岡の自然をテーマに、“身近な自然”、“絶滅の恐れのある動植物”、“県内の特定外来種”の小テーマに分け、解説文、写真、標本を展示しました。“県内の特定外来種”の展示は、今回の展示会のため作成したもので、今現在その一部を静岡県自然学習資料センターの1階と2階の間の掲示板に展示してあります。

今回の展示は、夏休みで訪れた小学生に、なかなか人気があったようです。交流館の職員の方からは、ぜひまた、展示企画を考えてほしいと、頼まれました。



展示を行った一階ホール



特定外来種の展示物

図書紹介

大阪市立自然史博物館叢書②

標本の作り方

自然を記録に残そう

大阪市立自然史博物館著

東海大学出版会 2500円



本書は、大阪市立自然史博物館叢書の第2巻として、大阪市立自然史博物館のそれぞれの専門学芸員が執筆して編集された本です。目次は以下の通りで、博物館の大型標本から家庭や学校で簡単に作成できる標本、また標本の記録のつけ方、標本の活用、採集のマナーまで、写真とイラストも活用されて、とてもわかりやすく解説しています。

標本を実際に作らない人でも、読み物としても気楽に読めて、自然史博物館の標本作成や保存など仕事に触れられる本です。

1章 化石・岩石・鉱物の標本作り、2章 植物・菌類の標本作り、3章 昆虫の標本作り、4章 無脊椎動物の標本作り、5章 脊椎動物の標本作り、6章 記録を残そう、7章 標本や記録を使ってみよう、8章 採集のマナー、おすび、付録1 標本作りに必要なものの入手、付録2 主な自然史系博物館